

平成19年度少人数学級に関する調査の概要

調査の概要

1 調査のねらい

小学校第1・2学年での35人学級の効果と課題を明らかにする。

2 調査の対象

(1) 対象校

今年度35人学級を実施している50校

(2) 対象者

校長

保護者 [抽出校(10校)]

3 調査の時期

調査は、平成19年8月中旬から下旬までとする

4 調査の内容

(1) 校長対象

ア 少人数学級の学習面の効果

イ 少人数学級の生活面の効果

ウ 少人数学級の指導についての課題・意見

エ 欠席数等の変容等の少人数学級の効果を示す具体的データ

(2) 保護者対象

ア 少人数学級の認知度

イ 少人数学級の効果

調査結果

1 校長を対象とした調査

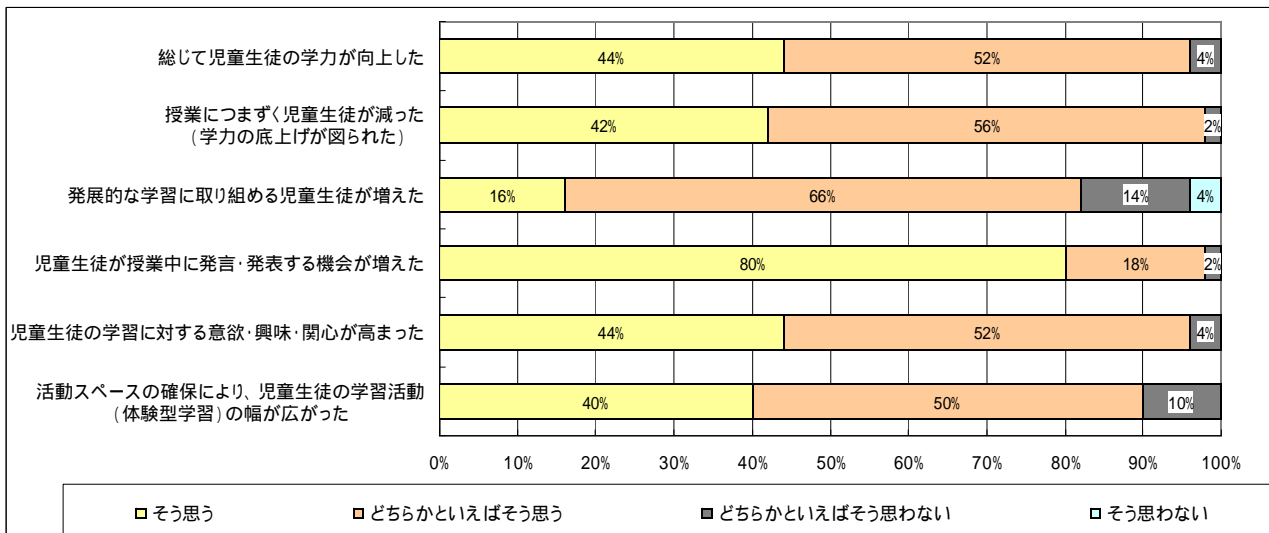
(1) 結果の概要

ア 学習面の効果

学習面の効果について示したのが、次の[グラフ1]である。

[グラフ1] 学習面の効果

N = 50人



前の頁の[グラフ1]のとおり、「総じて児童生徒の学力が向上した」と回答した校長の割合は96%（そう思う44%、どちらかといえばそう思う52%、昨年度91%）である。

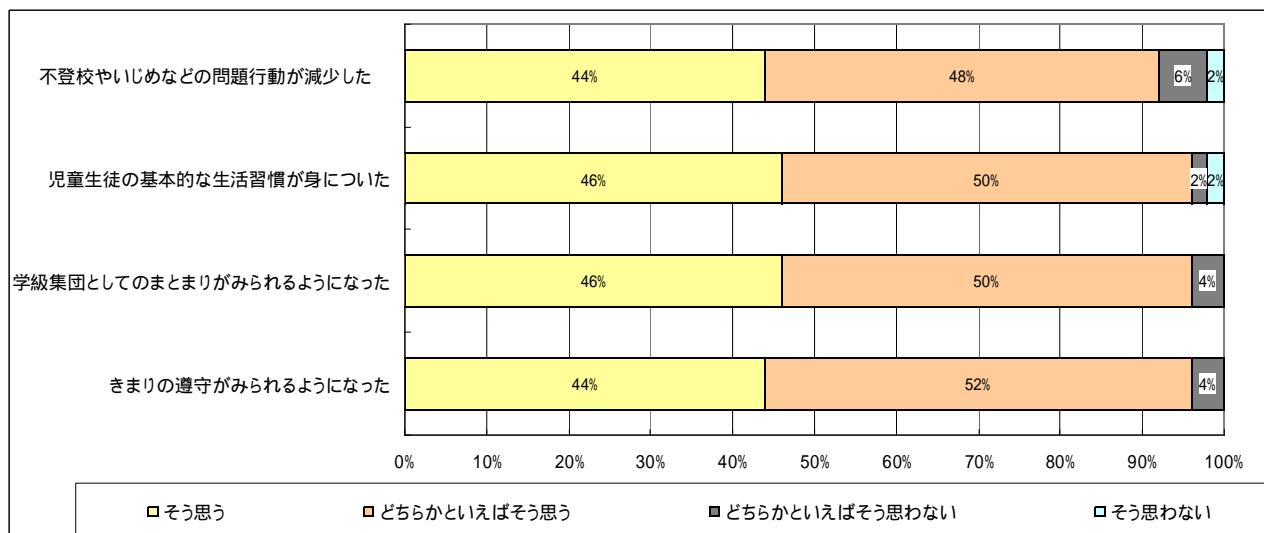
また、「授業につまずく児童生徒が減った（学力の底上げが図られた）」と「児童生徒が授業中に発言・発表する機会が増えた」の項目において効果があると回答している割合が、98%であることをはじめ、「児童生徒の学習に対する意欲・興味・関心が高まった」（96%）、「活動スペースの確保により、児童生徒の学習活動（体験型学習）の幅が広がった（90%）」等、ほとんどの項目においてその割合が90%を超えている。

イ 生活面の効果

生活面の効果について示したのが、次の[グラフ2]である。

[グラフ2] 生活面の効果

N = 50人



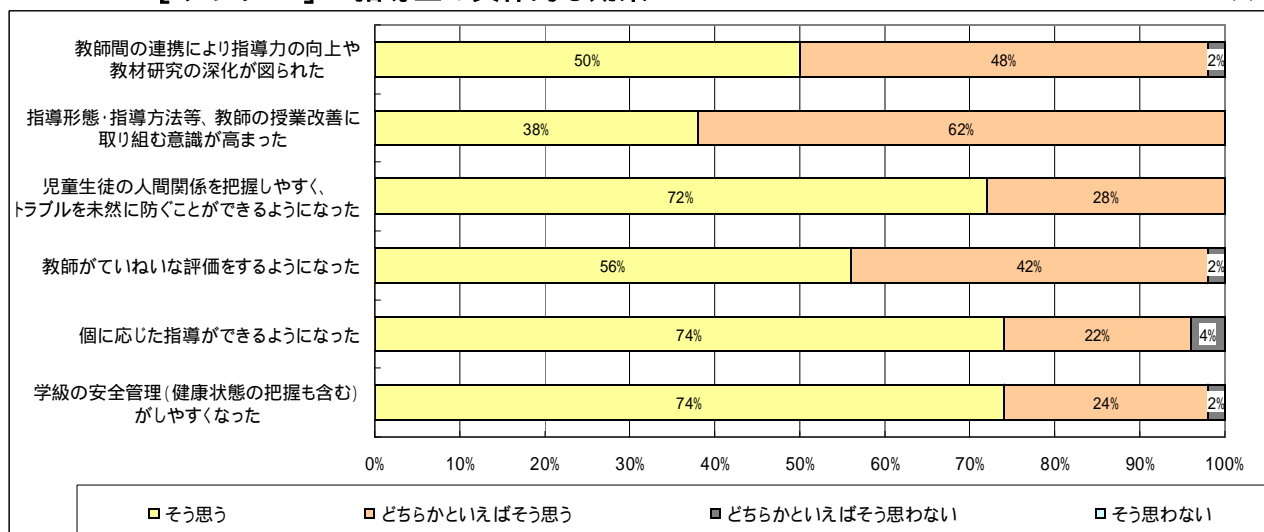
生活面の効果としては、上の[グラフ2]のとおり、「児童生徒の基本的な生活習慣が身についた」「学級集団としてのまとまりがみられるようになった」という質問に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答している割合が96%であることをはじめ、すべての質問項目で90%を超えている。

ウ 指導上の具体的な効果

指導上の具体的な効果について示したのが、次の[グラフ3]である。

[グラフ3] 指導上の具体的な効果

N = 50人



指導上の具体的な効果としては、上の[グラフ3]のとおり、「児童生徒の人間関係

を把握しやすくトラブルを未然に防ぐことができるようになった」という質問に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答している割合が100%であることをはじめ、すべての質問項目で90%を超えている。

エ 欠席数等の比較データ

以下の回答は、本年度新たに少人数学級になった学年の校長を対象とし、回答を求め、とりまとめたものである。

欠席数等の割合等について平成18年度データをもとに本年度（平成19年度）データと比較すると次頁の[表1]・[表2]のとおりである。

割合とは、例えば、保健室利用者数を在籍数で割った商である。

【表1】 平成19年度と平成18年度との比較（第1学年）

N = 19校

項 目	増加した学校数	減少した学校数	備 考
欠席数の割合の増減	6	13	
保健室利用者数（病気）の割合の増減	8	11	
保健室利用者数（けが）の割合の増減	6	13	

【表2】 平成19年度と平成18年度との比較（第2学年）

N = 26校

項 目	増加した学校数	減少した学校数	備 考
欠席数の割合の増減	11	15	
保健室利用者数（病気）の割合の増減	12	14	
保健室利用者数（けが）の割合の増減	12	14	

オ 登校しぶり、不登校などについて

登校しぶり、不登校などの傾向を示した児童がいる学校数の変容は、次の[表3][表4]のとおりである。

【表3】 登校しぶり、不登校などについて（第1学年）

N = 19校

項 目	減少した学校数	備 考
A1：4月当初に登校しぶりがあった学校数	12	
A1のうち1学期末までに改善した学校数	5	
A1のうち現在改善しつつある学校数	6	
変化がなかった学校数	1	

【表4】 登校しぶり、不登校などについて（第2学年）

N = 26校

項 目	減少した学校数	備 考
A2：4月当初に登校しぶりがあった学校数	5	
A2のうち1学期末までに改善した学校数	3	
A2のうち現在改善しつつある学校数	1	
変化がなかった学校数	1	

カ 落ち着いて話を聞くことが困難な児童について

落ち着いて話を聞くことが困難な児童がいる学校数の変容は、次頁の[表5]と[表6]のとおりである。

【表5】落ち着いて話を聞くことが困難な児童について（第1学年）

N = 19校

項目	減少した学校数	備考
B1：落ち着いて話を聞くことが困難な児童がいる学校数	17	
B1のうち1学期末までに改善した学校数	2	
B1のうち現在改善しつつある学校数	15	
変化がなかった学校数	0	

【表6】落ち着いて話を聞くことが困難な児童について（第2学年）

N = 25校

項目	減少した学校数	備考
B2：落ち着いて話を聞くことが困難な児童がいる学校数	21	
B2のうち1学期末までに改善した学校数	2	
B2のうち現在改善しつつある学校数	18	
変化がなかった学校数	1	

（無回答1）

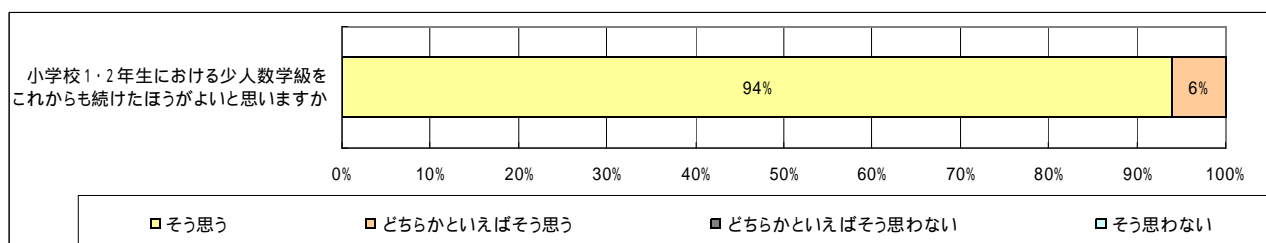
キ 今後の方向性

今後の方向性を問うた質問に対する回答は、次の[グラフ4]と[グラフ5]のとおりである。

「小学校1・2年生における少人数学級をこれからも続けたほうがよいと思いますか。」という質問に対し肯定的に回答（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」）している割合は、100%である。

【グラフ4】今後の方向性について

N = 49校



（無回答1校）

ク 少人数学級の課題について（校長を対象とした調査の自由記述から）

（括弧内の数値は、回答数を示すものである。ただし、複数回答もあるものであること）

（ア）35人学級編成から40人学級編成に変わる際、うまく適応できるように指導すること

（6）

（イ）想定学級数を超え、教室確保が困難な学校があること（1）

（ウ）体育などある程度人数が必要な教科もあり、学習集団の編成については、柔軟な対応が必要であること（1）

ケ 今後の取組に関する意見について（校長を対象とした調査の自由記述から）

（ア）少人数学級は効果が大きいので、中・高学年の少人数学級編成も前向きに検討してほしい。（20）

（イ）一人一人が大事にされるのはよいが、手のかけすぎ目のかけすぎが日常的になると自主性をそねたり我慢強さを欠いたりするのではないかと。教職員定数を増やし学級編成を弾力的に行えるようにした方が効果的では。（1）

（ウ）少人数学級とサポート教員の配置とは別に考え配置してほしい（4）

（エ）3年生に進級した際の実態調査を実施してほしい（1）

（オ）人数が少なれば一人一人に目を向けることができる。できれば30人学級が望ましい。（2）

- (カ) 特別に支援を必要とする子への対応等を考えると少人数学級より、岩手独自に進めてきた少人数指導(すこやかサポート)のほうが、指導効果が上がると感じる。よって少人数指導をより充実させてほしい。(2)
- (キ) 設置基準の中に特別な支援を要する有無が加味されるとありがたい。(1)
- (ク) 学習不応児がいた場合の担任以外の支援体制を確立する。(1)
- (ケ) 少人数指導教員配置の積極的弾力化を推進する。(1)
- (コ) 学年の連携の強化や学年主任のリーダーシップを発揮する。(1)

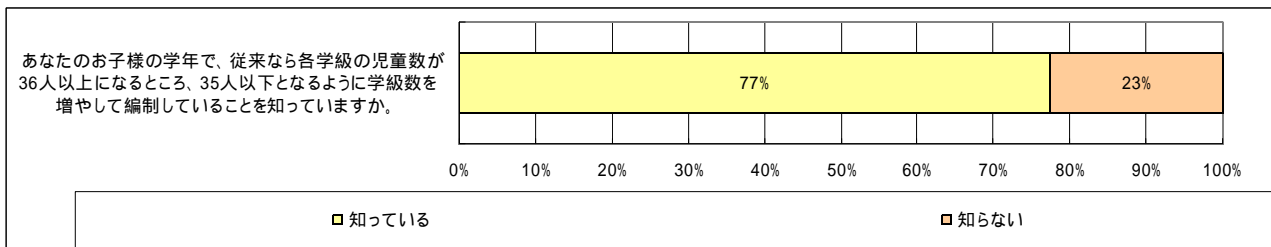
2 保護者を対象とした調査結果

(1) 認知の状況

少人数学級になっていることを認知している保護者の割合は、次の[グラフ5][グラフ6]である。

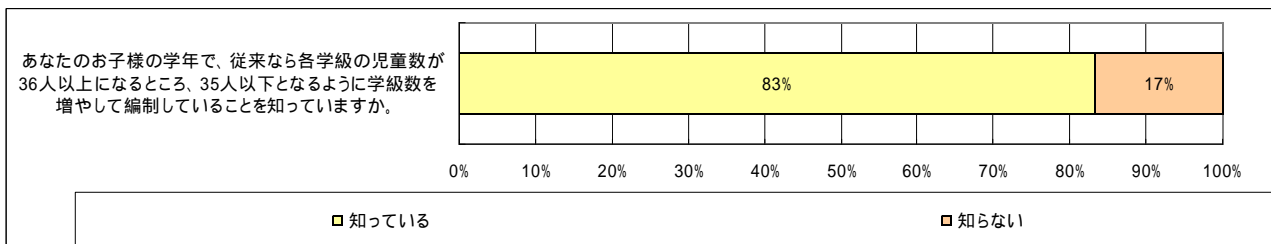
【グラフ5】 少人数学級の認知度（第1学年）

N = 106人



【グラフ6】 少人数学級の認知度（第2学年）

N = 204人



少人数学級の認知度は、上の[グラフ5][グラフ6]のとおり、第1学年で77%、2学年で83%である。

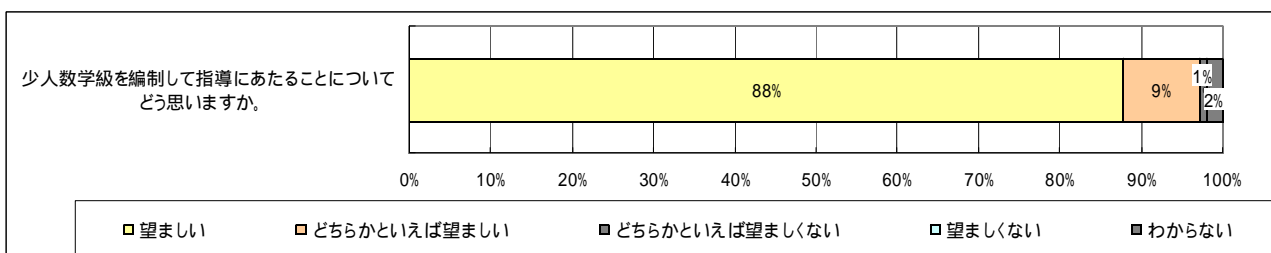
昨年度、第1学年を対象に調査した結果は88%であった。

(2) 少人数学級への賛否

少人数学級への賛否の割合を示したのが、次の[グラフ7][グラフ8]である。

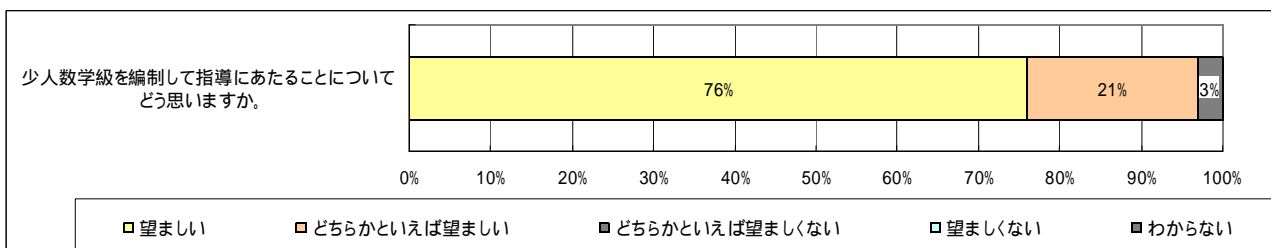
【グラフ7】 少人数学級への賛否（第1学年）

N = 106人



【グラフ8】 少人数学級への賛否（第2学年）

N = 204人



少人数学級への賛否は、上の[グラフ7][グラフ8]のとおり、少人数学級の指導に賛成している（「望ましい」。または「どちらかといえば望ましい」）保護者の割合は、第1・2学年とも97%である。

昨年度、第1学年を対象に調査した結果も97%であった。

(3) 少人数学級を望ましくないと考える主な理由

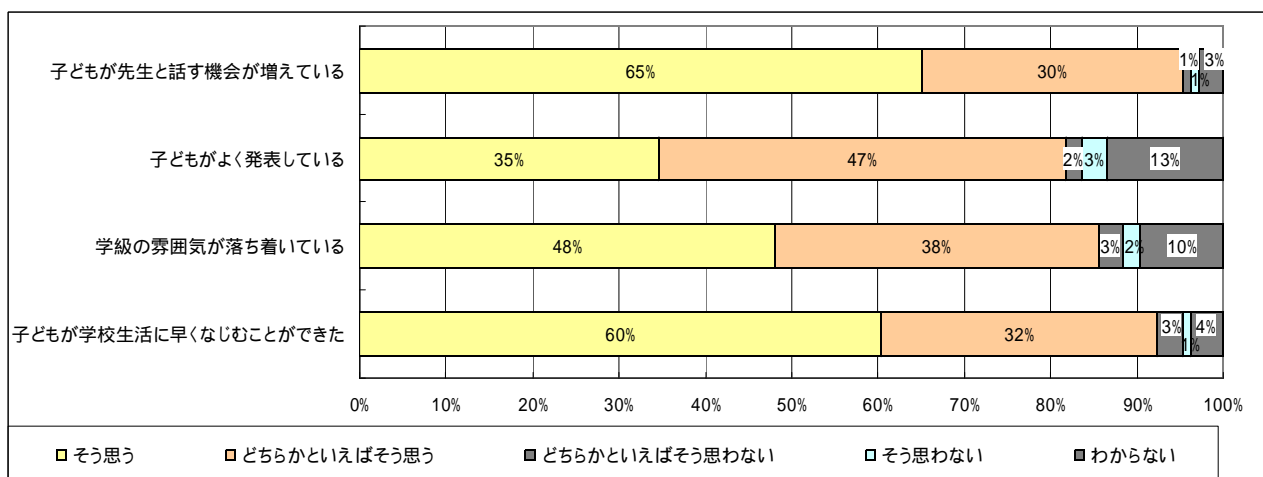
- ・ よいかどうかわからない。
- ・ 人数の多い少ないにかかわらず指導できる先生が望ましい。
- ・ 35人が少人数なのか疑問。
- ・ 低学年で少人数学級は必要だと思う。しかし、すべてのことを担任一人するのは無理がある。少人数学級の他にすこやかサポートのような学年で自由に動ける人がいて細やかな指導をもっとできるようにするべきである。

(4) 少人数学級の効果

少人数学級の効果を示したのが、次の[グラフ9][グラフ10]である。

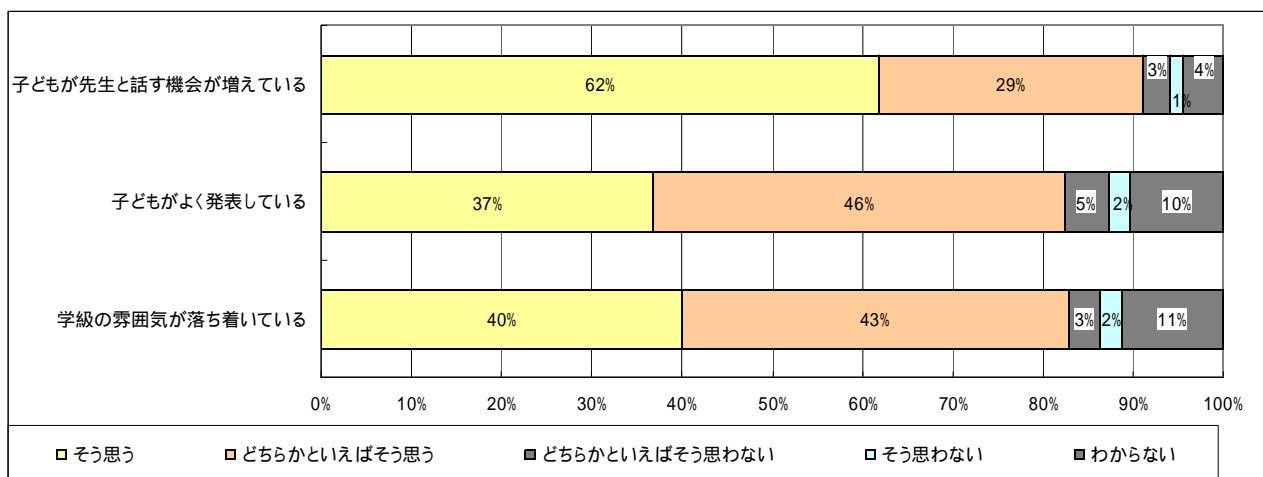
[グラフ9] 少人数学級の効果(第1学年)

N = 106人



[グラフ10] 少人数学級の効果(第2学年)

N = 204人



上の[グラフ9]や[グラフ10]のとおり、どの項目でも80%以上の保護者が効果を認めている(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答)。

第1学年では「子どもが先生と話す機会が増えている」(95%)や「子どもが学校生活に早くなじむことができた」(92%)と感じている保護者が多い。

また、第2学年でも、「子どもが先生と話す機会が増えている」(91%)と感じている保護者が多い。

(5) 少人数学級の指導の成果として感じている主なこと

- ・ 子どもの話をちゃんと聞いてくれること

- ・ 教室の中に余裕がある空間があり、精神的にもよい。
- ・ 子どもをよくみってくれるので少しのことでも相談しやすい。
- ・ 先生と子どもが接する機会が多く、子どもの特性を認めてもらっている。
- ・ クラス参観を見に行ったときも兄弟（3年以上）のクラスと比べても参観もやすく、先生の目がクラスにゆきとどいていると感じた。
- ・ 少人数なのでまんべんなく友達になることができる。
- ・ 1年生は特にはやいうちに学校生活に慣れるように思います。
- ・ 個に応じた指導がしやすい。
- ・ 先生が余裕をもっているように感じています。その結果いつでもクラス内が穏やかで子どもも楽しく学校生活が送れているように感じます。

3 調査結果のまとめ

(1) 少人数学級の効果について

校長への調査結果から効果として考えられることは次のとおりであり、これらのことから小学校第1・2学年における少人数学級は有効であると思われる。

ア 総じて児童生徒の学力が向上した等、学習面で効果がみられたこと

- ・ 授業における発言や発表の回数が増えていること
- ・ 教師が個別に指導する時間が増えることから、つまり児童が減り、基礎基本の定着が図りやすいこと
- ・ 児童の学習に対する意欲・興味・関心が高まっていること
- ・ 教師が児童の人間関係を把握して、トラブルを未然に防ぐことや、個に応じた指導ができるようになったこと

イ 総じて児童生徒の基本的な生活習慣の定着等、生活面で効果が見られたこと

- ・ 児童が学校生活に早くなじむことができ、落ち着いた生活を送ることができること
- ・ 基本的な生活習慣が身に付きやすく、学級集団としてのまとまりやきまりの遵守等が見られるようになったこと
- ・ 登校しぶりや落ち着いて話を聞くことが困難な児童が1学期中に改善されている学校が多く、児童が学校生活にスムーズに対応できていること
- ・ 学校の安全管理や健康状態の把握がしやすくなり、保健室利用者が減少していること

ウ 保護者への調査結果からも「子どもが先生と話す機会が増えている」等、少人数学級の有効性を示す意見が多い。

(2) 少人数学級の課題について

校長への調査結果から少人数学級の課題として考えられるものとして次のことがある。

ア 35人学級編成から40人学級編成に変わる際、うまく適応できるように指導すること

イ 手のかけ過ぎが日常的になると自主性を損ねたり、我慢強さを欠いたりすることも考えられること

(3) 少人数学級の今後の取組について

校長への調査結果から今後の取組に関する意見として次のことがある。

ア 少人数学級であっても「すこやかサポート」の配置による複数の教員による指導が望ましいこと

イ 少人数学級より岩手独自に進めてきた少人数指導の方が効果的であること

ウ 35人学級を継続してほしいという要望が多く、一人一人に目を向けるため、30人学級が望ましいこと

エ 教職員定数を増やし、学級編成を弾力的に行えるようにすること